

乳幼児運搬様式の国際比較

——ベビーバギーと乳母車の使用法をめぐって——

岩 田 浩 子

Cross Cultural Study on Ways to Carry Babies; Occasions for Using Baby-baggy and Stroller

Hiroko IWATA

Abstract

In order to clarify the cross-cultural characteristics of the baby-carrying style and the usage of baby-baggy or stroller, a total of 315 couples and their children were photographed at a zoo or a park in Nagoya, San Diego, Berlin, Budapest, Helsinki and Stockholm. Most of the parents in Helsinki and Stockholm had one or two strollers and used them to carry their children. However, about a half of the parents who brought their baby-baggy to the zoo in Nagoya carried their children without using their baby-baggy. Parents in Nagoya seemed to prefer carrying their children on their chest or piggyback than carrying them by a baby-baggy. Many parents in Helsinki and Stockholm carried their children by their strollers and they rarely carry their children on their chest or on their shoulders. None of the parents in Helsinki and Stockholm carried their children on their back. However, parents in Nagoya, San Diego and Budapest sometimes carried their children on their chest, on their shoulders or on their back. In the case when parents carried their children without using their baby-baggy or stroller, the fathers in Europe usually carried their children on their shoulders. However, the parents in Nagoya showed the inclination to prefer carrying their children on their chest than carrying them on their shoulders.

緒 言

わが国の乳幼児運搬法について松田¹⁾は育児習慣について記した著書『日本式育児法』の中で「おんぶ」を取り上げ、背負う人の歩行時における安全性の面から高く評価している。しかし最近ではわが国でも子どもを背負って歩く人を見かける機会はほとんどなくなり、それにかわってベビーキャリアを用いた抱っこやベビーバギーを用いた乳幼児運搬を見かけることが多くなってきた。

筆者はこれまでベビーキャリアなしで抱く抱っこのしかたについての報告²⁾を行った他に、キャリアを用いた乳幼児運搬法に関しては、日本式おんぶの研究³⁾、乳児運搬具を用いた抱っこの姿勢⁴⁾、キャリアで抱っこしたときに生じる死角について⁵⁾の報告を行ってきた。一方、ベビーバギーや乳母車のようなわが国の育児文化としては比較的新しい乳児運搬法については犬飼⁶⁾が興味深い報告を行っているのを注目していたが、その報告⁶⁾の中にあるわが国特有

ではないかと考えられるベビーバギーの使用法に関しての十分な国際比較資料をこれまで得ることが出来ず、報告するには至らなかった。

乳幼児運搬法に関しては気温などの生態学的要因が育児行動に影響をおよぼしているとの指摘もあり(Whiting ら⁷⁾), わが国の運搬様式の特徴を知るためには日本国内の調査にとどまらず、世界各地の乳幼児運搬法についても広く観察する必要があると考えられる。今回はこれまでに国内とともに欧米で蒐集した乳幼児運搬様式に関する観察資料もかなり蓄積できたので、その資料に基づいて比較文化の視点からベビーバギーと乳母車の使用法を含む乳幼児運搬様式の国際比較を行った。

対象と方法

研究資料の蒐集はすべて動物園や遊園地で子ども連れを野外観察する方法により行った。観察を行った都市は名古屋の他にアメリカのサンディエゴ、中央ヨーロッパ(中欧)のベルリンとブタペスト、スカンジナビア(北欧)のヘルシンキとストックホルムの6都市である。観察記録には35mmカメラを用いた。子ども連れは核家族型の親子連れとは限らないため、一組の子ども連れの観察には一組全体がまとまって観察できる出入口付近以外では5~10分間継続して行い、子ども連れの構成人員や乳幼児運搬法を確認した。

野外観察を行った場所と観察年月日、および、観察された子ども連れの中でこの研究の対象として取り上げた事例の総数は315組であり、内訳は表1に示したとおりである。

表1. 観察場所と子ども連れの数

地域	都市	観察場所	観察年月日	子ども連れの数
日本	名古屋	東山動物園	1998. 11. 23	56
アメリカ	サンディエゴ	サンディエゴ動物園	1993. 12. 27	75
中欧	ベルリン	ベルリン動物園	1999. 06. 19	45
	ブタペスト	ブタペスト動物園	1999. 08. 28	20
北欧	ヘルシンキ	ヘルシンキ動物園	1999. 07. 24	50
	ストックホルム	スカンセン	2003. 08. 16	69
合計				315

対象とした子ども連れはその中にまだ幼いために十分に歩くことができず、運んでもらう必要のある子どもが少なくとも1人含まれていることを条件に選んだ。その判定基準は、そのグループの中に(1)実際に抱かれたり背負われている子どもがいること、または、(2)ベビーバギーや乳母車が使われていること、の何れかに該当することである。

分析資料としては35mmカメラによる写真プリント資料を用いた。また、資料の統計処理には統計解析ソフト HALBAU(Windows版)を用い、表1の都市別の比較を行った。なお、各都市の観察場所はストックホルムを除いてすべて子ども連れを数多く観察できる動物園である。また、ストックホルムの場合も「スカンセン」は『野外民俗博物館』とでも呼ぶことのできる広大な公園であり、スカンジナビアの動物を集めた動物園も付設されているので、他の都市の動物園と大きな差はないと考えられる。

結果および考察

1. 観察された子ども連れの数とその構成人員

動物園などに子ども連れで出かける場合、必ずしも子どもとその両親が連れだつて出かけるとは限らない。表2は都市別に子ども連れの構成人員を大人の人数と子どもの人数のクロス集計表により示したものである。

表2. 都市別にみた子ども連れの構成人員

地 域	都 市	大人の数	子どもの数			計	合計
			1人	2人	3人以上		
日 本	名古屋	1人	0	0	0	0	56
		2人	22	12	5	39	
		3人以上	7	6	4	17	
アメリカ	サンディエゴ	1人	0	0	0	0	75
		2人	33	26	5	64	
		3人以上	6	4	1	11	
中 欧	ベルリン	1人	4	4	1	9	45
		2人	24	4	3	31	
		3人以上	3	2	0	5	
	ブタペスト	1人	0	0	0	0	20
		2人	13	2	3	18	
		3人以上	0	1	7	2	
北 欧	ヘルシンキ	1人	0	0	0	0	50
		2人	17	23	6	46	
		3人以上	1	3	0	4	
	ストックホルム	1人	2	1	0	3	69
		2人	36	13	3	52	
		3人以上	5	8	1	14	
合 計						315	

どこの都市でも2人の大人が1人または2人の子どもを連れている事例が大半を占めていたが、名古屋、サンディエゴ、および、ストックホルムでは大人が3人以上という子ども連れもかなりの割合を占めていた。一方、ベルリンとストックホルムでは大人1人で複数の子どもを連れている例もみられた。

大人の数が3人以上というのは写真資料から推測する限り、子どもと両親の他に祖父母が加わっている例が多いと考えられるが、その他に、子どもと両親および両親の友人が子ども連れに加わっているとみられる事例も少なくなかった。子どもを連れて動物園に行くということは親の世代にとっても、また、祖父母の世代にとっても屋外で過ごす楽しい団らん機会となっているのであろう。

一方、1人の大人が複数の子どもを連れている例は数こそ少ないもののベルリンやストックホルムでは観察された。観察日時はいずれも日曜日や祝日、あるいは夏期休暇やクリスマス休暇中だったことを考えると、家族連れが多いと予想され、大人が単身で複数の子どもを連れて動物園に出かけることは考えにくい。しかし、このことは名古屋やサンディエゴにはあてはまるかもしれないが、北欧や中欧の大都市にはあてはまらないことも考えられる。一人親の家庭

が増えてきていることや休暇の取り方が多様化していることを考えると、動物園などでも今後は大人が単身で1人または複数の子どもを連れて楽しむような余暇活動が増える可能性があると考えられる。

2. ベビーバギーと乳母車の使用率

(1) 持っているかどうか

動物園に子どもを連れて来るときにベビーバギーや乳母車（以下、この両者をまとめて「ベビーカー」と略記することにする）を使っているかどうかをみるために、まずはじめに「持っているかどうか」について調べた結果を図1に示した。

「持っているかどうか」ということは、実際に子どもを乗せて使っているかどうかとは別に、乳幼児運搬用具として所持しているかどうかをみたものである。

また、ベビーバギーと乳母車をまとめて「ベビーカー」と呼ぶことにしたのは、わが国における最近の呼び方の慣用にしがったのと同時に、どちらも乳幼児運搬車という共通性に着目したことによっている。しかし、ベビーバギーと乳母車には差があり、主にヨーロッパで用いられている伝統的な乳母車が比較的

大型で形状も変化させにくい乳児運搬車であるのに対し、ベビーバギーは比較的軽量小型で折りたたみ可能、携行可能である点にそれぞれの特徴と違いがみられる。

図1によればどの都市でも1台だけ持っている事例が最も多かったが、北欧のヘルシンキやストックホルムでは90%を超える事例が乳母車かベビーバギーを持ち、その中で2台持っている例も12%~14%あって、ベビーカーの所持率が高かった。一方、名古屋やサンディエゴ、ブタペストでは、1台持つ事例が55%~65%あったが、2台持つ事例は少なく、逆に「ベビーカーなし」の事例が25%~35%あって、北欧の都市とはかなり違いが大きいことが分かった。また図1で「借りている」という項目は動物園で貸し出しているベビーバギーや4輪車のついた箱に子どもを乗せて引っ張る乳幼児運搬車を示しているが、名古屋やブタペストではこの貸出車を活用している事例の割合が他の都市に比べて高く、ベビーカーを持っているか否かに関しては図1の4項目で比較すると6つの都市の間に有意差がみられた (χ^2 -検定, 有意水準: $p < 0.01$)。

この差は Whiting ら⁶⁾ が述べているように育児文化が気候風土に影響されていることを反映していると考えられる。すなわち、ストックホルムやヘルシンキ、ベルリンのような北欧や

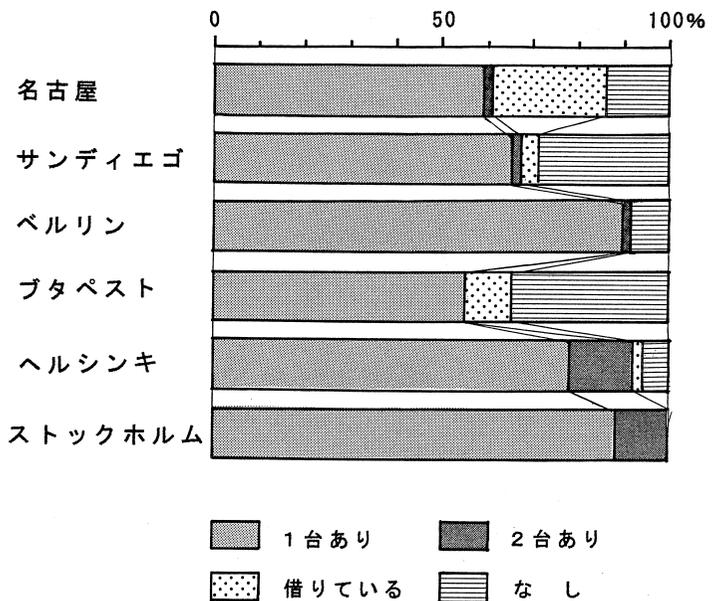


図1. ベビーカーを持っているかどうか

中欧の比較的緯度の高い地域にある都市では寒冷な気候風土の影響によりかなり大型の乳母車や防寒具を装備したベビーバギーが必要とされることが考えられるからである。またそれとは別に日常的にベビーカーが容易に使えるかどうかは、都市の公共交通機関の在り方に関わっていることが考えられる。つまり、動物園や遊園地でベビーカーを使うためには、折りたたんだベビーカーを自家用車に積んで運んで持ってくるか、はじめからベビーカーに子どもを乗せ、家から動物園まで公共交通機関を利用して来ることができるかどうかに関わっていると考えられる。このような点を考えあわせると、北欧では町づくりの中に子どもは乳母車で運ぶという育児文化が受け入れられ、子ども連れの外出に様々な便宜やはかれるとともに、公共交通機関や公共空間のバリアフリー化が進められていることも見逃せないといえることができる。

(2) 子どもを乗せているかどうか

持っているベビーカーに実際に子どもを乗せているかどうかをみた結果を表3に示した。

表3. ベビーカーに子どもを乗せているか：人数 (%)

ベビーカーの型と台数	1人用1台		1人用2台, 2人用1台または、動物園の貸出車		合計
	いる	いない	1人だけ	2人とも	
名古屋	20(47.6)	20(47.6)	0(14.3)	2(4.8)	42(100.0)
サンディエゴ	32(60.4)	14(26.4)	1(1.9)	6(11.3)	53(100.0)
ベルリン	26(63.4)	13(31.7)	0(0.0)	2(4.9)	41(100.0)
ブタペスト	8(61.5)	3(23.1)	0(0.0)	2(15.4)	13(100.0)
ヘルシンキ	23(48.9)	15(31.9)	1(2.1)	8(17.0)	47(100.0)
ストックホルム	50(72.5)	8(11.6)	3(4.3)	8(11.6)	69(100.0)
合計	159(60.0)	73(27.5)	5(1.9)	28(10.6)	265(100.0)

都市間に有意差あり (p < 0.05)

表3中の乗せて「いる」という項目は一人乗り用のベビーバギーや乳母車に1人の子どもを乗せていることを示しており、「いない」は空のベビーカー1台を押している事例の数を示している。項目の中の「1人だけ」は2台持っている1人用ベビーカーの一方、または、2人乗りベビーカーの座席（前後に2座席、並列に2座席の2つの形がある）の片方にだけ乗せているものを示している。また、「2人とも」は2台の1人用ベビーカーに2人乗せている場合、2人用1台に2人乗せている場合、および、動物園の貸出車（2人以上乗せられるもの）に2人乗せている場合を含んでいる。

ベビーカーに実際に子どもを乗せているかどうかに関しては、6つの都市の間に有意差がみられた (p < 0.05)。とくに、サンディエゴ、ベルリン、ブタペスト、ストックホルムの4都市ではベビーカーが実際に使用されている率が高く、欧米ではベビーバギーや乳母車が乳幼児運搬に主要な役割を持っていることが示されているといえることができる。

一方、乗せて「いる」という事例が半数以下であるのは名古屋 (47.6%) だけではなく、ヘルシンキにも同様の傾向がみられた (48.9%)。しかし、この2都市を「いない」と「二人とも」の項目で比較するとかなり違うことが分かり、「いない」と「二人とも」の割合は名古屋では47.6%と4.8%、ヘルシンキでは31.9%と17.0%となっていて、ヘルシンキでは2人ともベビーカーで運ぶということが行われているのに対し、名古屋では2人乗せる割合は低く、ベビーカー

を持っていても半数近くが子どもを乗せるためには使っていないということが分かった。犬飼⁶⁾は名古屋の東山動物園と名古屋港水族館周辺、および、東京の上野動物園における親子連れの野外観察結果から、ベビーカーは子どもの運搬だけでなく、親子連れが持ち歩く荷物の運搬に使われ、そのとき子どもは抱っこされたりおんぶされることが多いと報告しているが、今回の名古屋における観察結果は犬飼⁶⁾の観察結果と同じ傾向を示していると考えられることができる。

3. 乳幼児運搬様式—ベビーキャリアの使用と人力運搬について—

(1) 最も幼い子どもの状態

まだ歩けないか歩き続けられない子どもを含む子ども連れに関しては親や周囲の大人はどのように接しているかをみることも乳幼児運搬法を検討するためには重要と考えられる。そこで、最も幼い子どもが歩行可能かどうかということとともに、歩行が難しい子どもに対して親や周囲の大人はどのような運搬様式をとっているかをみてみたい。

それぞれの子どもの連れにおいて最も幼いとみなせる子どもが一人で歩いているかどうか、運ばれている場合はどのように運ばれているかを都市別に示したものが表4である。

表4. 最も幼い子どもの状態—運ばれる場合と歩く子どもの人数 (%)

都 市	運ばれる場合				合 計
	ベビーカー	キャリア使用	人力のみ	歩 行	
名古屋	22(39.3)	0(0.0)	25(44.6)	9(16.1)	56(100.0)
サンディエゴ	31(41.3)	5(6.7)	36(48.0)	3(4.0)	75(100.0)
ベルリン	27(60.0)	1(2.2)	13(28.9)	4(8.9)	45(100.0)
ブタペスト	10(50.0)	1(5.0)	9(45.0)	0(0.0)	20(100.0)
ヘルシンキ	32(64.0)	0(0.0)	6(12.0)	12(24.0)	50(100.0)
ストックホルム	59(72.5)	0(0.0)	4(5.8)	6(11.6)	69(100.0)
合 計	181(57.5)	7(2.2)	93(29.5)	34(10.8)	315(100.0)

都市間に有意差あり (p < 0.01)

都市により歩行可能とみなせる子どもの数が異なっていたのと同時に、運ばれる場合もベビーカーによるものと人力運搬によるものの比率が都市によって大きく異なっていた。そのため、最も幼い子どもの状態は都市間に大きな違いがあった (有意差あり: p < 0.01)。

表4によれば、名古屋、サンディエゴ、ブタペストの3都市は他のヨーロッパの都市より「人力のみ」で運ばれるものの比率が高いことが特徴となっている。「人力」による乳幼児運搬とは、ベビーキャリアを用いる運搬法も人力運搬に含まれるが、ここではベビーキャリアを使う場合と使わない場合に分けて考え、キャリアを使わない「人力のみ」の人力運搬の内訳については次の項で検討を加えたい。

名古屋、サンディエゴ、ブタペストの3都市では「人力のみ」の運搬の割合が高いのに対し、ベルリン、ヘルシンキ、ストックホルムの3都市では「人力のみ」の運搬様式も若干観察されたが、ベビーカーによる運搬の割合が大半を占めた。とくにストックホルムではベビーカーによる運搬が70%を超えるとともに、ストックホルムとヘルシンキを合わせた北欧の2都市ではベビーキャリアの使用は観察されず、乳幼児運搬用の用具としてはベビーカー(とくに乳母車)が主要な役割を担っていることが明らかになった。

(2) ベビーカー以外の方法で運ばれる子どもの運ばれ方

ベビーカー以外の方法で運ばれていた112人の子どものうち、キャリアを使用して運搬されていたのは10人(8.9%)にとどまり、102人(91.1%)はキャリアを使わずに運搬されていた。どの都市の動物園でも子どもを抱いたり背負ったりして散歩することはあるにしても、キャリアはあまり使われない傾向にあるとあってよいであろう。

図2はキャリアを使わずに「人力運搬」されていた子どもの運ばれ方を示したものである。ベルリンを除く5都市では

「抱っこ」の比率が最も高く、どの都市でも50%を超えていた。これは「抱っこ」が子どもと向き合う姿勢がとれる上、姿勢保持ができない幼い子どもに対しても適用できる運搬様式であるためと考えられる。

「おんぶ」は名古屋、サンディエゴ、ベルリンの3都市で観察されたが、比率はいずれの都市でも低かった。また、「おんぶ」に関しては北欧の都市とブタペストでは観察されず、「おんぶ」という運搬法が行われる地域は限られているこ

ととともに、「おんぶ」の伝統がある名古屋でもキャリアを使わずに大人の肩や背中につかまらせておんぶすることはあまり行われないことが分かった。

一方、「肩車」は名古屋を除いてどの都市でもかなり観察されており、大人の肩に座って姿勢保持ができるようになった子どもにはこの運搬法が好まれ、大人も好んで行っている様子が見えられた。

「抱っこ」、「おんぶ」、「肩車」のようなベビーカー以外の乳幼児運搬法に関しては6つの都市間に有意差まではみられなかった($p = 0.0548$)。しかし、都市による若干の差があり、名古屋では「抱っこ」の比率が非常に高い(89.7%)のに対し、アメリカやヨーロッパの各都市では「肩車」の比率がかなり高いという違いがあった。

動物園や遊園地で子どもを人力運搬するのは母親よりも父親が多いという国内での観察結果^{2), 6)}が得られているが、今回の欧米各都市の観察でも子どもを抱っこや肩車する事例は父親(男性)が多かった。子どもを連れての外出に対する父親(男性)の参加のしかたに世界共通のものがあるとも考えられる。しかし、人力運搬の様式に関しては「抱っこ」と「肩車」の違いにもみたように都市によって差があり、子どもと父親(男性)との接し方に関しては都市間にやや違いがみられるとあってよいかもしれない。

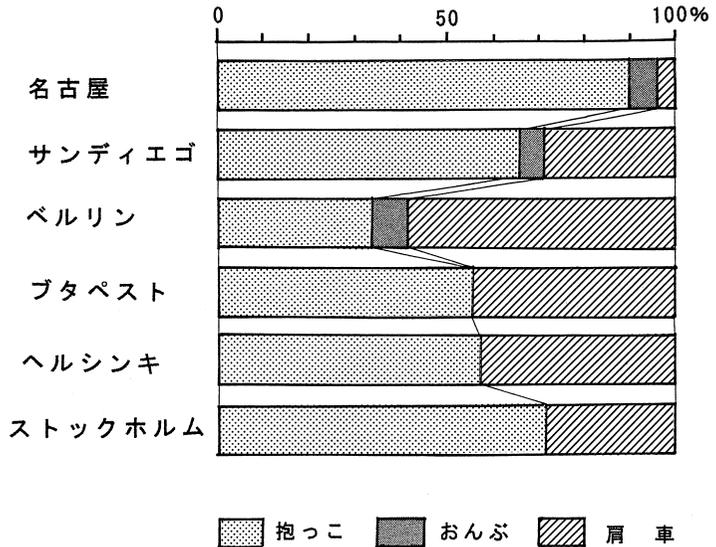


図2. ベビーカー以外の方法で運ばれる子どもの運ばれ方
(キャリアを使用しない場合について)

まとめ

乳幼児運搬様式の国際比較を行うため、名古屋、サンディエゴ、ベルリン、ブタペスト、ヘルシンキ、ストックホルムの動物園で野外観察を行い、315組の親子連れの乳幼児運搬様式を写真資料により分析し、ベビーバギーと乳母車の使用法を含めて検討を行った。

結果を要約すると次のとおりである：

- (1) 観察された子ども連れは核家族のグループだけでなく、単身や3人以上の大人と複数の子どもからなるグループもかなり含まれていた。
- (2) ベビーバギーや乳母車を持っているかどうかに関しては都市間に有意差があり、ベルリンやストックホルム、ヘルシンキでは持っているものの割合が高かった。
- (3) 持っているベビーカーに子どもを乗せているかどうかに関して都市間に有意差があった。とくにストックホルムでは子どもを乗せている割合が高く、逆に名古屋では低かった。
- (4) それぞれの子ども連れの中で最も幼い子どもの状態に関して都市間に有意差があり、とくに子どもが運ばれている場合に大きな違いがみられた。北欧ではベビーカーで運ばれていることが多く、名古屋、サンディエゴ、ブタペストでは人力運搬の割合が高かった。
- (5) 人力のみによって運ばれている子どもの運ばれ方に関しては都市間に有意差まではなかった。しかし、「おんぶ」は北欧では観察されず、乳幼児運搬法にはかなり地域差があることが推察された。また、「肩車」による運搬法は名古屋では少数だったが、他の5都市ではかなり多くみられた。

【謝辞】本研究は平成13年度名古屋女子大学特別研究助成費より助成を受けた「乳幼児運搬法に関する比較文化的研究」の一環として行われたものである。この特別研究助成に対し心底から感謝の意を記したい。

文 献

- 1) 松田道雄：日本式育児法，pp.142-149. 講談社現代新書 (1974)
- 2) 岩田浩子，犬飼博子：野外観察による抱っこの研究，名古屋女子大学紀要，43(家政・自然編)，pp.13-21(1997)
- 3) 岩田浩子：日本式おんぶの研究—おんぶの姿勢と乳児運搬用具の着用感について—，名古屋女子大学紀要，42(家政・自然編)，pp.1-9(1996)
- 4) 岩田浩子：乳児運搬具を用いた抱っこの姿勢について，名古屋女子大学紀要，44(家政・自然編)，pp.1-12(1998)
- 5) 岩田浩子：乳児運搬具使用時の安全性の問題—乳児を抱く人の足下の視野について—，名古屋女子大学紀要，47(家政・自然編)，pp.1-8(2001)
- 6) 犬飼博子：子ども連れに見る子どもと荷物の運び方，生活行動研究 1，pp.4-13(1994)
- 7) Whiting, B.B., & Whiting, J.W.M. 綾部恒雄・名和敏子(訳)：六つの文化の子どもたち：心理—文化的分析，誠信書房 (1978)